

Title	感情社会学の可能性 : 感情の社会性をめぐって
Author(s)	樋口, 昌彦
Citation	年報人間科学. 20-2 P.509-P.523
Issue Date	1999
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/5424
DOI	10.18910/5424
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

感情社会学の可能性

— 感情の社会性をめぐって —

樋口 昌彦

〈要旨〉

感情社会学の主張の根幹とは、感情は個人的事象・自然現象である、と考へがちである社会通念に対して、「感情は、社会的なものである」という事態を説明していくことであった。これをふまえ、70年代後半以降展開されていく感情社会学の初期の論考の多くは実質上、このテーゼを「感情は、社会に影響を受けて成り立つ」という主張としてとらえ、一定の成果を上げた。しかしながら、その主張、「感情は、社会に影響を受けて成り立つ」という主張は、感情の社会性の一面のみを見ているにすぎず、それだけに注目すると、重要な要点を把握しそこねる。あるいは、むしろこの説明のみをくりかえすことは、「個人が感情を持つ」という通俗理解をなぞることになり、感情社会学が主張しうる「感情の社会性」の重大な要点を取り逃がす恐れがある。したがって感情社会学のさらなる展開の可能性を求めらば、この通俗理解の内実を明らかにし、本来の注目すべき含意Ⅱ「感情とは個人を越える事象でもあり、その意味において社会的である」という点を明確化する必要がある、それが本稿の目的である。

キーワード

感情社会学・感情の社会性・コミュニケーションからの感情・感情の語彙論

1 はじめに

人々の抱く感情に関する問題は、社会学においては決して中枢をしめるテーマとして論じられてきたわけではないが、実はとても応用範囲の広いテーマである。それ故、ウェーバーの感情的行為やパーソンズの感情中立性の概念等とはより、ジンメル・シエラー・ゴフマン・作田など、実に多くの社会学の巨頭達が、広い意味での感情^①に関係した問題を扱ってきたのだといえる。そして、それぞれが独自の切り口から大きな成果をあげているのは周知の通りである。しかしながら、これらはおのおの独自の研究の一部として論じられており、必ずしも感情を直接的に主題とするものではなかった。あるいは少なくとも、それぞれが体系づけられ統一的な領域として形成されるには至っていないかった。

ところが、一九七〇年代後半から主にアメリカにおいて、感情社会学 *sociology of emotion* という名の下に、人々の抱く感情の社会的あり方を直接の主題として研究する一群が台頭してきた。そしてそれは、多くの研究者によってある程度体系づけられ、一つの領域として成立し、研究の蓄積がなされてきている。本稿では、この領域の論考をふまえて感情を論じようとしている。

では、この感情社会学が統一的な領域として問題にしてきた主題とは何なのだろうか。それは、いうまでもなく「感情とは社会的なものである」という主張につきる。しかしともすると、この感情の

社会性というテーゼは、限られた用法によってのみ理解される傾向がある。本稿の目的は、この限定性を指摘し、その限定性にとらわれず、感情社会学がさらに展開するための可能性を探ることにある。

2 感情の社会性の限定的理解

「感情とは社会的なものである」という主張は、「Emotions are Social Things」と題した論文の中でマッカーシーが、以下のように明解に説明している。

「新しい領域としての感情社会学は以下のような問いを投げかけてきた。どんな相互行為的要因が特定の感情を生起するのか。どのように規範は感情（表現）を規定するのか。社会的集団や階層の間にどんな感情の差が存在するのか。文化や歴史を通して感情はどのような変化を遂げたか。これらは、いうまでもなく社会学的な問題である。」^②

この言明に感情社会学の主題が簡潔な形で示されており、その企てがイメージできることと思う。つまり、我々が日々感じる感情について、相互行為的要因・規範・社会的集団・階層・文化・歴史といういわゆる社会学的要因がどれほど影響を与えるのか、を分析しようというわけである。では、具体的にはどのような研究がなされてきたのか。ここでは初期の段階において基盤を与えた研究として

代表的な二つの立場を挙げる。

その最初期の業績であり、かつ感情の社会性をおそらく最も容易に想定させるものとして、ケンパーによる社会関係に注目する感情理論がある。彼は、一九七八年に発表された論文において、この理論の骨子を提出している。

「権力と地位という二つの次元に基づくモデルを導入することで、(感情の) 経験的な観察がなされると主張する。権力と地位の過剰／不足を感じることが様々なつらい感情—罪、恥、不安、憂鬱、怒り、を導くのである。」³⁾

この理論の基本発想は交換理論による感情理解であり、まずケンパーは行為者と相手の二者関係を想定する。その上で、その関係上にある「権力」と「地位」(および「責任主体」) 概念に注目し、それらを根源的な変数として、その増減によって罪・恥・不安・抑鬱・怒りの五つの感情を説明しようと企てているのである。例えば、ある個人が相手に過剰な権力を行使してしまい、かつその責任が自身自身にある場合に罪の感情が生じる、という具合にそれぞれの感情を説明していく。彼は、感情を二者関係上で受け渡される権力・地位の変数によって引き起こされるものとして理解しており、つまり、社会関係という社会性に還元して説明するわけである。

この領域のもうひとりの草分けであるホクシールドもまた、同時に規範という社会性に注目した感情理論を発表した。それは社会

生活の具体的場面における感情規則(feeling rule)という概念による説明である。

「(感情) 規則は、どのように人々は「状況に対して適切に」感じようとする・感じないようにするのか、を支配している。この考え方は、感情と共に状況の定義というものに目を向けることによって、どれぐらい個人は本質的に「社会的」か、「社会化されているのか」という点を示唆している」⁴⁾

まず感情の文化規範が存在し、その規範を社会化した個人がそれとの関係によってさまざまな感情を感じるという主張である。そしてこれは、我々が社会生活の具体的場面で様々な感情規則に従って状況を定義し、感情を経験している事実に向まく目をむけさせた。我々の日常生活における感情は、常にその裏に社会的に共有された感情規則が対応して存在している。

彼らの研究は、それぞれ社会関係や社会規範という、まさに社会学のみが扱う分析枠組みを導入し議論を構成したところに、その価値があった。そして、これらの研究から、感情社会学は個人の感情がいかに社会から影響を受けるか、という点を主なテーマとしてきたわけである。確かにこれは、「感情が社会的なものである」という感情のあり方の一部を見せてくれるものであり、以降、研究の主流であり続けている、と考えられる。

しかしながら、これらから単純に感情社会学のテーマを、「感情は

社会に影響を受ける」としてだけとらえるのは、早急である。あるいはこれらの業績を受けて、社会関係や感情規範等の社会的条件のみに注目・精緻化していくような研究態度は、おそらくある種の限界を含んでいる。なぜなら、この「社会から感情への影響」という一方向的な感情の社会的構成という理解は、実は感情の社会性の限られた一面にすぎないからである。

では、その限定性とは何なのだろうか。それは、まず感情を持つことを前提とし、その上で、それに影響を与える様々な社会的条件についての観察をもつばらの主題とすることに由来する。つまり、ここであげた理解においては、「個人が感情を持つ」という事態をまったく疑っていないのである。

この「個人が感情を持つ」という前提は、感情に関して我々が抱いている通俗的理解と全く重なる。我々は、たいてい日常的に感情とは個人に從属したものと信じており、「自分だけの感情を持つており」「私の感情は私が一番知っている」ことを当然だと思ひ、「私の感情は私のものである」と、かなり強く強く確信を持っていると言えるだろう。つまり我々は、「個人が感情を持つ」という考え方を、当たり前のものとして、強固に信じ込んでいる。そして、前に挙げた感情社会学の理解も同様に「感情は社会に影響を受けて成り立つ」と考えることにおいて、暗黙の内に「個人が感情を持つ」という考え方を前提として受けいれ、研究の出発点としてまったく疑っていないのである。そしてここには、本稿が指摘しようとしているある種の錯覚がある。

はたして「個人が感情を持つ」という確信を当然のこととして放置し、出発点としてもよいのだろうか。もちろん、この疑問の背後には、感情とは実は社会等の外部の力によって支配された社会の所有物であり、自分のものと感ずるのは幻想に過ぎない、などという極端な主張があるのではない。そうではなく、結論を先取りするならば、それは、「二人の個人が一つの感情を持つ」という具合の、自己に從属する感情という前提は、我々が素朴に信じるほど明確なものではない、というものである。あるいはいいかえるなら、感情とはしばしば個人を越える事象としても現れるものであり、それこそが感情社会学が積極的に主題として展開すべきテーマである、という主張である。

3 「個人が感情を持つ」というテーゼを疑う。

ここでは諸々の具体例について感情社会学において論じられている論考を参考にする事によって、「個人が感情を持つ」という発想がそれほど確かなものでないことを明らかにしてゆく。

3・1 内的循環

感情を個人的なものと考えた場合、おそらくまず「私の感情は私だけが知っている」と、主張することが考えられる。しかし、実際には、私が感情を知ることにはしばしば困難がつきまとうことを明らかにした研究がある。

私自身の感情という側面に執拗にこだわる感情社会学の研究者であるエリスは、自分自身の感情に問いかけることを重視する。彼女は、社会学的内省という概念を通じて、彼女自身の感情に関して分析し、内省的な語りによる感情の変容というテーマを論じている。具体的には、自分が医者の診療所で死に遭遇した体験について、自分自身の内省的な語りが以下のような六つの段階を経て変容したことを明らかにしている。

「異なつた状況において感情の対象が異なる場合においても、同一の感情のプロセスが起こることが、内省的語りのなかに見られる。・・・例えば、病院で死に直面した経験における私自身の語りは、驚くべきことに、Rambo Romaiがストリップバーにおいてダンスをした体験の語りと酷似したプロセスをたどつた。⁵ 第一段階においては、我々は、その経験を非現実的あるいは多元的な現実として語つた。第二段階では、無力さと活力、強さと無関心さ、受容と否認、宿命と希望を表現するために、笑いと怒りのような相対する反応を同時にみせた。第三段階においては、状況のあいまいさによる恐怖から我々自身を守るために、感情ワークを行った。我々は、最初の恐怖の感覚から自身を守るために、怒りや誠実さなど他の感情を意図的に思い起こそうとしたのである。その次の段階では、我々は孤独ではないということを確認しようとした。『全ての男は、全ての女を利用して』とストリップバーが納得するのと同様に、寡婦になりたての私は、『全ての人々は

死ぬ』と納得しようとした。最後の段階では、我々が闘つてきた多元的な現実の曖昧さの中に、なくさめを見いだすようになった。『非現実』を経験しそれと闘うことのほうが、とつてかわる現実を単に直視することよりは容易なのである。内省は、注目すべき流動性の下において、調査者に様々なパターンを見つけさせる。⁶

この分析を引いて、単に死という衝撃的な出来事に直面した際に自分の感情を言ひあてるのに苦労をした、だから自分で感情を明らかにするのは難しい、と言いたいのではない。ここでエリスは、内省を素材として感情を分析し、劇的に感情が変容したり、ある時は感情がどうどうめぐりしたり、あるいはまた元に回歸するようなさまざまな変容のパターンを観察している。つまり一連の自分自身の語りを、混沌の中に秩序を見いだす過程として説明するのである。これは、よくわからなかつた感情が徐々に明らかになる過程であるのみならず、語りが感情変容のひきがねとなり、感情が再秩序化の過程をたどるという指摘である。ここに、自分自身の感情を特定することの困難さを見いだすことができる。エリスのこの考察において注目すべきことは、感情を明らかにする行為自身が、かえつて感情を変容させてしまう可能性である。内省としての感情分析という視点は、感情を語ることは感情の明確化が、不断に感情を変容させる点を指摘している。

またこの他にも、同種の感情の特徴を引き起こす契機の説明がある。感情が常に規範にさらされていることを、山田は、ホクシール

ドの感情規則概念の説明において以下のようにまとめた。

「ホクシールドは、『あるべきもの（観念）』と『あるもの（認知された事実）』のギャップが感情を生じさせるという前提をおく。その過程によって生じた感情は、自然なものとして経験される。つぎに、経験されている感情（感じているもの）は、感情規則（feeling rule—感じなければいけないもの）によって、評価される。一致しない場合、新たに不快な感情が生じ、感情ワークをはじめとした様々な努力（それを総称して、感情管理と呼ぶ）が要請される。・・・この生成モデルをみると、感情は自然に生じるものであるどころか、二重に社会的に規定されるものとしてとらえることができる。一つは、感情生成の際の『あるべきもの』の時点で、もう一つは、感情規則、つまり『感じなければいけないもの』の時点で、社会が介入する。」⁷²

山田が説明するこの二重の社会的規定とは、まず最初に感じる感情が社会性にさらされているだけにかぎらず、それによって派生する感情もまた連続して社会性・規範性によって影響を受ける可能性を示している。これはつまり、我々が日常生活において感じる感情は原理的に常に規範性との関係にさらされ疎外・変容から逃れることが不可能であり、それによって新たな感情が生起することを示唆している。

これらの二つの考察は、感情がしばしば循環的性質を持つことを

説明している。感情を明らかにすることが感情変容を引き起こす可能性のあることや（エリス）、感情を感じるという事態が常に社会性・規範との関係において新たな感情を生む可能性があること（山田）は、感情が不断に変容する可能性を持つていることを意味する。さらにこの循環は、いわば自己内部の対話における循環であり、したがって我々は、この循環性から自分の力だけで逃れることは容易なことではないだろう。

要するに、これらの論考は、感情を一人ががんばって探求しても簡単に探求できない可能性を指摘していることになる。感情とは、それについて真剣に考えることによってより取り逃がすような性質を持つており、自分自身の感情を十分に省みるという行為自体が、感情の状態を、いい意味であれ悪い意味であれ、何らかの影響を及ぼし、それ以前の状態ではあり得なくするのである。

あるいは、つぎのような誰しもが経験のあるような簡単なエピソードをひくことで、より容易に理解できるかもしれない。異性との関係について悩んでいる場合を考えてみる。一人で悶々と考えていても解決しなかったことが、親友に電話をすることで、気持ちに感情に区切りがつけられることのようなことは誰にでも経験のあることだろう。そして友人に「じゃあ相手に気持ちを告白するしかないんじゃない」と簡単に言い切られ、それまでとは異なる新たな自分の感情を「発見する」なんてことも、しばしばあることではないだろうか。

これは、私の感情を私が一番知っているとどこか、むしろ自分自

身の感情だからこそかえってわからないことを示す例である。自身自身の感情が、一番わからないものでもありえるのは、我々は日常経験として十分承知していると思われる。

この性質は、避けられないものといえるだろう。感情は単に複雑だから把握が難しいのではない。厳密に明確化しようとすればするほど取り逃がすような流動性的なものであるから、自分がひとり把握することが困難なのである。したがって「私の気持ちは私が知っている」ことは、実はさほど確実ではないわけである。

3・2 外的構成

これで、すくなくとも感情とは私だけが明らかにできるものである、という考え方が強固なものではないことは指摘された。しかし、それでも他人には、わたしの感情にはアクセスできない、つまり「私の感情は、すくなくとも他人ではなく、私だけが管理している。私に帰属している」と考えるかもしれない。しかし、感情の構成主義をラディカルな形で主張するクルター、および彼のディスコース分析を感情の議論として整理して見せた中河の議論を参考にすると、それもまた断言できないような事態をあげることが可能である。

クルターは間主観的に構成される感情に注目した。その具体的な分析は、精神医療ソーシャルワーカーと分裂病の患者、患者の母親のやりとりのディスコース分析にみることができるところである。そこでは、感情表出がどんな出来事にも対応していない破瓜型分裂病の患者（シーラ）に対して、本人・二人のソーシャルワーカー（W1、W1

2）・母親の四者の面談における会話という協同作業において、徐々に彼女の感情の「原因」を「幻覚」として同定していく過程が描かれている。

（何の脈絡もなくすすり泣いていたシーラが突然、）

シーラ…（大声で笑いだす。楽しそうになる。）

W2…私のことを笑っているの？

シーラ…ちがう。

W1…私のことを笑っているの？（シーラの笑い声が大きくなる。）どうした？（シーラはさらに大きく笑う。）わたしたちのこ

とを笑っているの？どうしたの？

シーラ…わからない。

W1…わかっているんでしょ？（…）言いたくないの？

シーラ…そう。

W2…どうして？

母親…どうして？（1・5秒）いままつき泣いていたわね。

W1…また例の笑い声が聞こえたの？

シーラ…そう。

W1…こんどはなんて言っていた？

シーラ…いじ 苛めに、来る。（すすり泣きはじめる）

W1…こんどはなんて言って、きみを脅してんの？

シーラ…私にむかって大声をあげて（…）ときどきわたしをから

かう（笑う。）³

このクルターがあげた事例および分析をふまえて、中河は以下のように説明している。

「この破瓜型分裂病の女性の感情表出は、どんな相互作用上の出来事とも対応していない。そのことは、このやりとりの参加者が彼女の感情の対象を見つげだそうとするときに問題を引き起こす。・・・シーラの感情のディスプレイの場合、その対象の同定は、一番目のソーシャルワーカーが「幻覚」を持ち出すことよって可能になった。上のやりとりを詳細に見るなら、周囲の者のイニシアティブのもとに、周囲の者と本人の相互行為を通じて「幻覚」という現象が紡ぎあげられていることが分かる。」⁹

そもそも破瓜型分裂病とは、「患者が、明確な対象も原因もないまま、情緒的行動を次々取り換えていく状態を漠然と指す」¹⁰わけであり、上の事例では、シーラ自身の内面のあり方がどのようになっているのかは会話だけから把握することは不可能である。にもかかわらずここでは、ソーシャルワーカーおよび母親の納得のために例の笑い声という「幻覚」に言及し、それによってシーラの感情の状態を特定しようとしている。これはあえて極端な表現をとるならば、いわば周りの人々の都合でシーラの感情を捏造している過程だと言うことができる。要するに、感情を感じる主体（シーラ）の営為ではなく、複数の人々の間でのやりとりの間で感情が構築されている

のである。

これは、その人の状態と感情をほとんど全く関係づけられないという点でいささかラディカルにすぎる議論かもしれない。しかし日常生活の場面に引きつけて考えるならば、例えばあなたが、会社の上司に対する軽いグチを友人に聞いてもらっている場合を想定してほしい。そのような場合において、友人による「絶妙な」相槌―「その上司はとても傲慢な奴だね」とか「ふつう、そんな卑怯なことをする上司はいないよ」などの言い回し―によって、ますます自分自身の中のその人物に対する嫌悪感がエスカレートしていくような経験はないだろうか。これは、本質的にはクルターの分析した相互行為上で確定していく感情と同種の事態だと考えることができる。会話等の言語的所産によって、最初はあまり強く感じていなかった感情が徐々に構築されていく、あるいは他人とのやりとりの間でどんどんエスカレートしていくというような体験は、我々は多かれ少なかれ実際に経験するところだと思われる。

このように個人の感情とはしばしば、(一)個人にとって明確ではない、(二)複数の相互行為によって決定する、わけである。この意味において感情はさほど確かなものではなく、個人において完結したものではないといえるだろう。

4 コミュニケーションによる感情

前節において、感情が個人に従属したものであるという「個人が感情を持つ」テーゼが、必ずしも確実ではないことを示した。そしてさらに、これらの事態は、さほど驚くような内容でもなく、生活を営んでいく上で我々はある程度承知しているとも言えそうなのである。にもかかわらず、はじめにも記したように、人々は通俗的に、個人が感情を持つことを当たり前のものとして出発点として確信をもっている。実はこの事態、つまり我々は感情がさほど個人的に完結したものでないという経験をしているにもかかわらず、個人的なものとして確信しようとしている事態にこそ、より根源的な感情の社会性を見て取ることが可能なのである。

ではなぜ我々は「個人が感情を持つ」という確信を持つのか。それは、逆に「個人が感情を持つのを否定する」ことを想像すれば考えやすい。つまり、現在の感情を疑うことは、感じる主体として私の存在を疑うこととはほぼ同義である。それは、端的に私の存在を危うくする。したがって日常生活においては、我々は自分の存在を危うくするような発想を持つことを避け、疑わないことよって安定を保っていると考えられる。この安定性とは、感情を感じる私の存在を確保することであり、それはつまり独自性を確保することによる個人の存在証明といいかえることもできよう。

そして少し考えればわかることだが、この独自性は、実は他者を

想定・存在することよってこそはじめて意味をなしている。例えば、自分の独自性が脅かされるような状況において、「私の感情は私にしかわからない」と、あらためて強く主張する場面を考えてみればよい。このメッセージの裏には明らかに「他人には私の気持ちはわからない」という主張がはりついている。なぜなら、他者がいなければ、そんな主張は、取り立てて言ったり思う必要はなく、意味をなさないのは明らかだから。つまり、この独自性の主張とは、他者との関係性への言及なのである。

これは、自らの存在の拠り所である独自の感情が、他者の想定によつてはじめて成立するということであり、ある意味でパラドキシカルな事態である。そして、このような他者との関係性が、より根源的な感情の社会性の一面だと考えられる。感情とは、人々がさがるうとする独自性の裏に密接に付着した他者との関係によつて現れるものと考えることが出来る。この意味で感情は、終始不可避に社会的なのである。

そして、この不可避の関係性という社会性の内実は、前節で挙げたエリスおよびクルターの考察に、両極として現れていると考えることができる。まず、外的な関係性Ⅱ外的なコミュニケーションによる感情に注目しているのがクルターである。個人の内面性にはほとんど注目せずに、他者との相互行為の上に現れてくる感情という視点は、彼の理論枠組みから明らかである。

「・・・社会構成主義的な感情の社会学にとつてのより実り多い企

てとは、社会的相互作用の中での感情の述語のじつさいの言明や帰属、その他の使用の構造的なロジックを研究することである。適切な社会構成主義的アプローチは「感情を示す主体」だけに心を注ぐのではなく、そうした主体がそこに編み込まれる／編み込まれる社会的行動の場に注目しなければならない」¹¹⁾

これは、外部の他者との不断のコミュニケーションによって現れる感情に注目すべき、という宣言としてとらえられる。

一方これに対してもう一つの極として、エリスが分析してみせた内的な対話Ⅱ内的コミュニケーションという視点が考えられる。この視点の基盤は、エリスが理論的根拠として依拠しているN・K・デンジンの感情に関する理論枠組みに現れている。

「もし感情性が自己感覚のプロセスとして概念化されるなら、それは自己における相互作用によるものとして理解できる。それは自分自身と現実あるいは想像上の他人の評価から反映されるものとして理解できる」¹²⁾

デンジンはミードの「I-me」図式に準拠し、他者と相互作用する自己が自己と相互作用する他者と同様に自己の内部で役割取得され、さらに相互作用に対して特定の態度をとる内的自己を生成することを想定した。そしてそこから役割取得された自己と他者が内的に相互作用を行うことを主張している。

これによって感情は静的な物体ではなく、あくまでも自己の内的コミュニケーションによって不断に生成・増幅・変容するプロセスとしての感情としてとらえられている。そして、感情を感じることこそが新たな感情を生み、感情が一連の過程として存在するという考え方が導かれている。これは、エリスや山田の論考とも通底している。能動的に自分の感情を見つめる場合（エリスの論点）や、必ずしも能動的でなくても、感情を感じることにまつわるある種の循環（山田の論点）とは、自分自身による内的コミュニケーションによるものである。

では一見正反対のものに注目しているクルターの主張とデンジンの主張は、相互には矛盾しないのだろうか。確かに、デンジンの理論枠組みとクルターの理論枠組みの総体をつぶさに対照するならば相いれないかもしれない。とくに主体の何らかの意識活動を認めるのか／認めないのか、という点において決定的に決別する可能性がある。実際にエリスは、クルターによる認知的な内省主義を誤りとする主張について批判している。¹³⁾ しかし、ここではそれら二つを矛盾するものとしては考えていない。むしろ逆に相補関係にあり、お互いを尊重することでより議論の洗練化が可能である、と主張したい。どちらか一方の立場だけでなく、両方の立場を並立させるところに感情理解の生産性豊かな可能性が認められる。

たしかにクルターの立場は、間主観的に構成・捏造される感情を強調するあまり、主体的営為を軽んじているかもしれない。しかし、先に挙げた上司へのグチの例のように、人々は間主観的に構成・捏

造された感情をも、やがて自分の本来の感情だと信じこんでいくのもまた事実ではないだろうか。つまり、主体的だと思いこまれていた感情が実は間主観的に構成されているという過程を明らかにするというクルター流の方法の裏には、間主観的に構成された感情が、あたかも自分本来の感情のように感じる過程を明らかにするという逆の事態もありうる。そしてエリスによる「語りによって再構成していく感情」の議論は、まさに語りという間主観的な言語的所産が「本来の」感情を変容／再構成させていく過程の分析として理解でき、それは、社会的に構成された感情が自己に内在化していく過程を意味し、クルターの立場からも十分注意を払うべき論考だと考えられるのである。

5 感情の語彙論

前節で、感情が終始コミュニケーションと共にある性質が指摘された。この考え方から感情を考えていく場合、感情表現の問題・感情の言語的追跡が展開への重要な手がかりとなると考えられる。なぜなら、コミュニケーションが感情のあり方に密接に関わるならば、情報の受渡しを必然的に伴っているが故に、言語の問題を含まざるをえないからである。そしてさらには、前節であげた二つの立場の研究が、内省的語りおよび会話分析という広い意味での言語の問題に注目しているように、社会における感情をめぐる現象は、言語があるからこそ複雑かつ魅力的な題材となりうるからである。

そうであるならば、いみじくも感情社会学のもっとも初期の段階においてショットが指摘した感情の語彙論の可能性を探らねばならない。彼女は、一九七九年に発表した論文に、こう記している。

「ある人が感情をどのように解釈するかは、ある程度（完全に決定されるわけではないが）文化と感情規則によって支配されている。したがって、人々が何を感じるのかについては、異なった社会において、異なった感情の「動機の語彙」によって性格づけられているのである。」¹⁴

ショットは感情の語彙論を、ミルズの動機の語彙論と相同的なものであることを主張しており、これは、感情の表現Ⅱ言語の問題に注目したものとして積極的に評価されるべきである。しかしながら彼女は、この論文のごく短い箇所で触れただけであり、その後あまり展開していない。またこのままでは、単に文化的語彙のあり方が感情のあり方を示しているという具合の平板な主張と読まれかねず、その有効性が十分に示されているとは言えない。しかし、そもそもミルズの動機の語彙論の含みを考えるならば、このような平板な理解にとどまらない感情社会学をさらに発展させうる重要なベースペクティブとしてとらえることが可能になる。

「ミルズの考え方のポイントの一つは、動機を行為者の内的属性あるいは内的状態とみる常識的な見方に対して、「動機はヴォキヤブ

ラリーである」として、いわば動機を行為者の外側に位置づけているところにある。・・・この面からみるなら、動機を行為者の内部にはなく、外部の言語世界、社会的なシンボルの世界に位置づけてとらえる、一種の動機外在論が成り立つ。そして、この外在論はさらに、社会的に形成された動機のヴォキャブラリーを用いて人々が自己および他者の様々の行為に動機を付与し、またそれについて互いにコミュニケーションしあうという、相互作用論的な視点をもともなっている。」¹⁵

この井上による動機の語彙論に関する優れた説明において、「動機」と「感情」を、完全に読み換えてみたらどうだろうか。これによって感情の語彙論の応用可能性が一挙に明確になってくる。

動機がしばしば内的状態として論じられがちであることと同様に、我々は感情を単なる内的状態として理解する傾向がある。それは、ここまでの議論された「個人が感情を持つ」という通俗理解と通底しているものと思われる。内面的な感情だけに焦点ををさることは、しばしば議論を閉息させてしまう。典型的には、一時期活発に議論されたC-P論争がある。ケンパーが整理してみせたこと¹⁶、これは、我々の感情を生理学的実体(Positivistic approach)なのか、文化的ラベリング(Constructionist approach)なのかという点を焦点としていたが、明解な決着を導いたとはいいがたい。その原因の一つは、そもそも感情を行為者の内部に位置づけたことにあり、このような議論は、少なくとも社会学が取り扱う題材としては、きわめて困難

なテーマであると言わざるを得ない。

そうではなく、感情を社会学において問題にするならば、動機の語彙論が動機を行為者の外側に位置づけるものとして構想することが必要となるだろう。そしてその感情の語彙・表現は、単なる内的感情のラベル・文化における感情の目録ではなく、エリスやクルターが論じたように、逆に言語的所産によって「本来の」感情に作用するという、通俗理解とは逆の事態をも視野に入れなければならない。これによって、感情をあらわしているはずの言語表現が、実は感情を追い越すという転倒しているかのような、しかしながらごく日常的に我々が体験する事態を、重視し吟味できるようにする。そしてこのような内的感情と感情表現の渾然とした状態の分析こそが、社会学において感情をめぐる現象に接近しうる方法の一つだといえるだろう。

6 むすび

感情の社会性を議論の焦点にする感情社会学は、しばしばいかなる社会条件が感情に影響するのか、にのみ注目しがちである。しかし、この一方向的な説明のみを重視すると、感情社会学の展開は疎外される恐れがある。感情が個人的に完結したものであるかのようなイメージを喚起・強化し、本稿で示したようなコミュニケーションを基盤とした感情の社会性を見えにくくしてしまうからである。

実際には感情は社会性と同時的にあるものであり、おそらく根源的に社会的なものであるにちがいない。

これを根源的だとするのは、極論をすれば、我々は自分の感情さえも全く気にかけないこと・どうでもいいとすることが可能なら、つまり他者の想定等の全てのコミュニケーションを完全に断絶することができうるなら、簡単に消滅するたぐいのものにすぎないと想定しているからである。しかしもちろんそんな仮想は社会的存在である人間としてぜったいにあり得ず、したがって生活を営む上での不可避のコミュニケーションこそが、感情を立ちあらわさせてきていると考えられる。

そしてこのことからあきらかになる結論とは、しばしば通俗的に共有する理解、あるいは感情社会学すらも暗黙に前提としがちな「個人が感情を持つ」という考え方は、実は無自覚に出発点¹¹前提とするべきではない、ということである。感情とは、単なる一人の人間の下位にある属性ではなく、人々が社会生活を営むことにおいて現れる社会的現象であり、刻々と変容する相互行為の所産としかいえないようなものであり、さまざまな社会状況と常に共存するものなのである。

この意味で感情とは「個人を越えるもの」——デュルケムの言葉を借りるならば社会的事実——なのである。これが、「感情の社会性」の重要な内実であるに違はなく、これから感情社会学が最も重視すべき方向性の一つは、このような事態に積極的に注目することにはちがいない。

(1) まずはじめに、感情を社会学的立場から論じようとするなら、特に本論のように個別的な感情の諸相を論じるのではなく、よりあいまいな感情をめぐる現象について論じようとするならなおさら、その指し示す範囲、つまり感情の定義が要求されるのが通常の手続きであろう。あえてあげるならば、「喜怒哀楽や好悪など、物事に感じて起る気持」(広辞苑第五版)のように想定している。しかし、本論では、あえて感情の定義の明確化・正確性を特定し、それから議論をすすめていくことにはこだわらない。その理由は、定義が困難な作業であることもあるが、もつと本質的な理由がある。それは、ここで要請されている「第一に感情とは何なのか」という定義・実体を特定化し、その後、それがどのような事態になっているのか、を明らかにしようとする順序こそ、本論が問おうとしている問題に他ならないからである。

- (2) [McCarthy 1989:52]
- (3) [Kemper 1978:30]
- (4) [Hochschild 1979:552]
- (5) [Rambo Ronai 1992]社会学の研究者であるRambo Ronaiは、自らストリップダンサーとなってその体験およびそれに付随する自身の感情に関して内省的な手法で分析した。
- (6) [Ellis 1991:36-37]
- (7) [山田 1997:76-77]
- (8) [クルター 1998:205-206]
- (9) [中河 1997]注9]表現の統一を図るため、固有名詞を一部変更している。
- (10) [クルター 1998:204]

- (11) [Coulter 1989:46-47] [中尾 1997] の参考文献を参照した。
- (12) [Denzin 1984:54]
- (13) [Ellis 1991:28]
- (14) [Shott 1979:1320]
- (15) [井上 1997:24]
- (16) [Kemper 1981]

参考文献

Coulter, Jeff, 1986, "Affect and Social Context: Emotion Definition as Social Task", in Rom Harre(ed), *The Social Construction of Emotions*, Basil Blackwell.

Coulter, Jeff, 1989, "Cognitive 'penetrability' and the emotions" in Franks, David D. and E. Doyle McCarthy (eds), *The Sociology of Emotions: original essays and research papers*, JAI Press.

クルター・ジェフ、一九九八、西阪 仰訳『心の社会的構成 ヴィトゲンシュタイン派エッセイメンクロジーの視点』新曜社。

Denzin, Norman K., 1984, *On Understanding Emotion*, Jossey-Bass.

Ellis, Carolyn, 1991, "Sociological Introspection and Emotional Experience," in *Symbolic Interaction* 14-1, JAI Press.

Hochschild, Arlie Russell, 1979, "Emotion Work, Feeling Rules, and Social Structure" in *American Journal of Sociology* 85-3.

井上 俊、一九九七、『動機と物語』『岩波講座 現代社会学—現代社会学の社会学』岩波書店。

Kemper, Theodore D., 1978, "Toward a Sociology of Emotions: Some Problems and Some Solutions", *The American Sociologist* Vol. 13.

Kemper, Theodore D., 1981, "Social Constructionist and Positivist

Approaches to the Sociology of Emotions", *American Journal of Sociology* Vol. 87.

McCarthy, E. Doyle, 1989, "Emotions are Social Things: An Essay in the Sociology of Emotions", in Franks, David D. and E. Doyle McCarthy (eds), *The Sociology of Emotions: original essays and research papers*, JAI Press.

中河 伸俊、一九九七、『社会構築主義と感情の社会学 ネット用改訂版』。岡原 正幸、一九九七、『感情社会学の成立と展開』『感情の社会学』世界思想社。

Rambo Ronai, Carol, 1992, "The Reflexive Self Through Narrative: A Night in the Life of an Erotic Dancer/Researcher" in Carolyn Ellis and Michael G. Flaherty (eds), *Investigating Subjectivity research on Lived Experience*, SAGE.

Shott, Susan, 1979, "Emotion and Social Life: A Symbolic Interactionist Analysis", *American Journal of Sociology* volume 84.

山田 昌弘、一九九七、『感情による社会的コントロール—感情という権力』『感情の社会学』世界思想社。

Possibility in the Sociology of Emotion: Focusing on the 'Emotion is a Social Thing' Thesis

Masahiko HIGUCHI

The sociology of emotion is a relatively new field within the discipline of sociology, and the main thesis in this field is "emotion is a social thing." However, there is often serious limitation in the meaning of this thesis.

In this paper, at first I try to indicate the limitation. It is based on our conviction that "we have our own emotions." Secondly, I discuss some theories of the emotions over the limitation that is focusing on an internal/external communication. Finally, I attempt to propose a significant way of thinking in the sociology of emotion. It is the position regarding expressions and vocabularies of emotions.

Key words

sociology of emotion, social construction of emotion, emotion as communication,
vocabulary of emotion